

## ギィ・ポーカーと 1950～70 年代の アメリカ-インドネシア関係<sup>1</sup>

ウィリアム・ブラッドリー・ホートン<sup>†</sup>

### Guy Pauker and US-Indonesia Relationships of the 1950s-70s

William Bradley Horton

During the 1950s and early 1950s, the Romanian-born political scientist, Guy Pauker, played a significant role in studies about the Indonesian military and politics after his emigration from a country rapidly falling behind the iron curtain. As Pauker began his professional career, and began his involvement with Indonesia, blind American anti-communism and Indonesian support for left-leaning nationalist movements helped lead to worsening relations, with the US actively supporting revolts against the Indonesian government and the CIA even caught flying bombing missions in Indonesia. Constructive contacts between the US and Indonesian governments became increasingly impossible, requiring assistance of an intermediaries or requiring "private" connections. During this period of strained relations, Pauker seems to have played a critical role in maintaining some kind of contact between Indonesians and the US.

This article seeks to shed light on Guy Pauker's background and life during the cold war years with an eye to better understanding his motivations for studying Indonesia and working with the CIA, Defence Department and other US government institutions on the one hand, and maintaining his "legendary" Indonesian contacts. Pauker's history in Romania remains the subject of speculation, but seems to be closely associated with his cold-war warrior stance. Like his relationships formed at Harvard, Pauker's relationships formed in Indonesia in the 1950s with PSI oriented intellectuals and Army officers in Jakarta and West Java seem to have been central for his research, but especially by the 1980s, these relationships were rarely seen publicly.

---

<sup>†</sup> 早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員・京都大学東南アジア地域研究研究所連携准教授

<sup>1</sup> 本研究は、早稲田大学後藤乾一名誉教授が平成 23 年度に立ち上げた「9・30 事件研究会」の成果報告である。5 年間続いた月例研究会をつうじ、9・30 事件を多角的に検証し、東西冷戦期の社会・文化のヘゲモニーを改めて掘り下げる機会を得た。特に当時、学生時代を送った座長（後藤乾一先生）をはじめ、村井吉敬先生、倉沢愛子先生といったインドネシア研究の大家が、記憶の確認や意見交換をされているところを間近に見ることは、年齢を重ねた「若手」インドネシア研究者にとって、代えがたい知的刺激の機会であった。このような場を提供して下さった後藤先生に感謝すると同時に、同じ目的に向かってともに進んでいった研究会メンバー諸氏にも謝意をあらわしたい。本論は、平成 27 年 3 月シカゴ AAS 年次総会および同年 9 月 19 日の LIPI の口頭発表を基に、発表に対するコメントも加味しながら執筆した。原稿や発表への助言に対して、Fadjar Thufail, Dede Oetomo, 山崎功, Mike Montesano, John Roosa, William Little, Brad Simpson, Budiawan, Wolfgang Linz, Henry Rosovsky, Clay Eaton, Robert Levy に謝意を表したい。また、本論文出版にあたり多大なる協力をしてくださった高地薫、山本まゆみ両氏に深く感謝したい。

最後に、発足当初からの研究会メンバーで、研究会成果を見ずにご逝去された村井吉敬先生、LIPI の発表の際、病魔と闘いながらも、真摯にパネル参加者に詳細かつ建設的なコメントをくださった Wijaya Herlambang 先生に、深く謝意を表すとともに、心よりご冥福をお祈りします。

「フォード財団とインドネシア政府の最初の接触は、1952年、ワシントンとジャカルタ駐在の外交部を通じてであった。このことだけからも、インドネシアが独立を宣言して七年経過した時点で、事実上アメリカとインドネシアの間に通常の人的コネクションが、存在していなかったことが明らかである。」<sup>2</sup>

ジョン・ブレズナン

1950年代初期のアメリカ・インドネシア関係の際立った特徴は、「人的交流の希薄さ」であったという一言に尽きる。1950年代を通じて、先鋭化する冷戦体制とともに、アメリカとインドネシアの交流の機会は増加していったが、反面、その冷戦体制の結果生じた政治対立によって、個人および組織を含めた公的な関係は冷え込み、実質上没交渉となった時期さえもあった。1969～74年の5年間フォード財団ジャカルタ・オフィスの所長を務めたジョン・ブレズナン（John Bresnan）は、回顧録の中で当手を振り返り、インドネシアにとって有意義なプロジェクトでさえ実施困難になっていった時代であり、既存の人間関係さえも疎遠になっていったと述懐している。ブレズナンは、その例として、マックス・マカギアンサル（Max Makagiansar）の態度が急変したことを引き合いに出し、当時の人間関係の難しさを紹介している。マカギアンサルは、インドネシア学術院（LIPI）所長の元補佐であり、フォード財団奨学生（1957～1960）として、ハーバード大学へ留学した経験を持つ、いわゆる親米派であった。ブレズナンとは個人的にも付き合いがあり、定期的に英語の手直しを頼んでくるほどの関係であった。しかし、マレーシア対決政策（Konfrontasi）が始まった頃から、ブレズナンへの連絡を断ってしまった。ある日、それぞれが車で移動中、車中にある互いに気づいたが、車から降りることなく、窓越しに親しげに手を振って挨拶したのが、彼らの最後の接触となった<sup>3</sup>。

このようにアメリカ・インドネシアの二国間関係が硬直化し、人的交流でさえも滞っていた1950年代末から早くとも1960年代末まで、強硬な反共産主義者で、カリフォルニア大学バークリー校政治学部教授およびランド・コーポレーション（RAND Corp.）のアナリストを兼務していたギイ・ポーカー（Guy Pauker, 1916-2002）が<sup>4</sup>、アメリカ・インドネシア間の、特殊な関係「改善」に重要な役割を果たしていたと思われる。具体的には、ポーカーは、両国の知識人、軍人、政府の「仲介役」として、それぞれの情報や見解を交換し、知識やイデオロギーを紹介し、様々な機会を仲立ちするキー・パーソンであったようだ。フォード財団のような組織では、事業が行き詰まりかけたときに、「伝說的」とまで言われたポーカーの人脈がその重要性を増したようだ。しかしながら、東西冷戦時代がすでに過去のものとなったこの数十年、インドネシア人がポーカーについて言及することはほとんどなくなり、またインドネシア人以外の主要なアジア研究者たちでさえポーカーについてほとんど言及しなくなっていった。語られることのなくなった東西冷戦の影の「立役者」であったポーカーではあるが、時代と共にポーカー自身もそして彼の影響力のある人脈の痕跡も消え去ってしまった。ランドの執行副理事長であるマイケル・リッチはこう語っている。

<sup>2</sup> Bresnan 2006: 31.

<sup>3</sup> Bresnan 2006: 47-48. ブレズナンは、マレーシア対決政策が没交渉の原因であったと考えていたようだが、マカギアンサルが国家学術調査副大臣（1962）に任命されたことで、政治的圧力も受けたであろうし、あるいは単に多忙になったからだとも考えられる。“Prof. Dr. Makaminan Makagiansar Meninggal Dunia,” *Kompas* (22 July 2002).

<sup>4</sup> 日本では彼の名前は「ガイ・J・パウカー」として紹介されていた。（スカラピーノ 1969）

彼はパークリーに在る間に、スカルノ後の困難な時代に国民を指導し、農業経済を発展させるべく奮闘することになるインドネシアの経済エリート、所謂「パークリー・マフィア」の個人的人脈を築いた。彼の東南アジアにおける人脈は伝説的で、彼の研究にとっても、ランドにとっても、またアメリカにとっても大きな価値を持つものだった<sup>5</sup>。

こうした、パークリーで教育を受けたエコノミスト達の枠をはるかに超える人脈は、1965年の事件の前後、スカルノ政府をよりアメリカ寄りでの軍の主導する政府に替えようとするアメリカ側の活動において、重要な役割を果たしたことは確かであろう。本論文は、ポーカーの政治的活動やその活動の動機、そしてなによりも、まだ公にはされていない彼のインドネシア人との関係およびアメリカ要人との人脈について検証する。

### ギィ・ジーン・ポーカー (Guy Jean Pauker)

ギィ・ポーカーという名前は、今日ではアメリカでもインドネシアでも、またインドネシアの政治や歴史を研究する学者の間でさえも、馴染みのない名前となっており、1965～66年にインドネシアを席卷した殺戮へのアメリカの関与を検証するという、極めて限られた研究分野においてのみ想起されるばかりである。ほぼ「無名」となった今、ポーカーの人となりを知るべく、本節では彼の学術的、また専門的経歴のみならず、彼の数奇な人生も紹介する。生い立ちや生活環境は、人々の思想思考に何らかの影響を及ぼすため、ポーカーの経歴や職歴を辿ることは、彼の政治活動の動機を解明し、彼について書かれている語りと「書かれていない語り」の意味も含め、彼のイデオロギーと仕事への理解を深めるために重要な役割を果たすからである。

公にされているギィ・ジーン・ポーカーの略歴では、誕生と大学の学位については頻繁に紹介されており、よく目にする内容は、1916年9月15日にルーマニアのブカレストで生まれ、1938年に文学士 (*lic en let*)、1939年に法学士 (*lic en droit*) の学位を取得してブカレスト大学を卒業した。その後、ソ連占領後の1947年頃、ブカレストで「アメリカ合衆国友の会 (Friends of the United States)」という組織設立に尽力した。1948年「友の会」の設立関係者ということもあり、その名前が反共産主義者の名簿に載り、反ソ連派の人々は追放されるという噂を耳にしたため、移民としてアメリカへ亡命<sup>6</sup>、その後ハーバード大学で修士号と博士号を取得した、というものである。

1948年以前のポーカーの足跡については、上記の略歴以外ほとんどなく、またその後についても極めて限られた情報しか見当たらない。彼の死後掲載された追悼記事や、ランドの上級研究員による追悼文にも、ポーカーの青年期に関する新たな情報も、両親の名前さえもなかった。ただ一つの追悼文が、パリ在住の姉ないし妹のことに触れ、1944～48年のポーカーの活動についてより詳細な情報、より蓋然性の高い説明をしている<sup>7</sup>。1948年に、彼が米国に移住する際に乗った船の外国人出入国用

<sup>5</sup> Rich 2002.

<sup>6</sup> Ransom 1975; Elliott 2010: 46. この、より詳細な情報の出所は、ポーカーの二番目の妻エヴァ・ポーカー (Eva Pauker) である。一般的には、反共産主義者と目された人々の追放とは、組織からの追放を意味したが、1946年の東欧からのドイツ人追放や、1947年の王家や側近のエリートの排除のような事態になることもあった。しかしながらまた、それがソ連占領期に、親米組織を立ち上げたという驚くべき行動と共に、米国への亡命の口実であった可能性もある。

<sup>7</sup> Rich 2002. Oliver 2002.

乗客名簿（後述）にも、本来記載されるべき詳細な個人情報、ポーカークの情報に関しては、彼の両親らしき名前さえ記載されていない。こうした記載の漏れや情報の欠落は、米国移民局関係の書類では、通常おこりえないことであり、考えられるのは、ポーカークと彼の亡命を事前に知っていたアメリカ政府の双方が、彼の身の安全のため、あるいはルーマニアに残った彼の親族の身の安全のために、彼の生い立ちを入国当初から隠匿しておく必要性に迫られていたということである。1930～40年代のルーマニアの歴史を紐解くと、王家から親ナチス政権（と鉄衛隊）への権力移行、激化する反ユダヤ主義、1944年8月23日の王党派のクーデター、そしてその後続くソ連軍進駐とソビエト権力の拡大という目まぐるしく政治が動いた時期であり、大戦後半のブカレストには、CIAの前身である戦略情報局（OSS）の現地事務所まで存在したほど、ルーマニア国内は大混乱した時代でもあった。このような当時のルーマニア社会状況を鑑みると、ポーカークがアメリカに移住した動機と彼の反共産主義の起源について、ここで検証することの重要性は当然のことある。当時の混乱した社会状況と、ポーカークが「正体を隠して」亡命したことから推測できるとおり、詳細な情報の入手は不可能であるため、ここにあげる記述は、確定した略伝というよりも、その可能性を推測した論考であり、今後のポーカーク研究の仮説提示であり、また研究の出発点の提言でもある。

ギィ・ポーカークの家族に関する情報がない以上、他の個人に結び付けるのはまず難しい。しかし、ここではあえてポーカークというルーマニアでも稀有な名前について調べることで、ギィ・ポーカークとの接点がないか検証してみよう。ポーカークという名字はルーマニアのユダヤ人家系<sup>8</sup>、そして初期ルーマニア共産党の有力な指導者であり閣僚経験者でもあったアナ・ポーカーク（Ana Pauker, 1893-1960）と夫マルセル・ポーカーク（Marcel Pauker, 1893-1937）に辿り着く<sup>9</sup>。ポーカークという名字は夫側の姓であった。夫に先立たれたアナ・ポーカークであったが、アナは夫の死後も彼の親族との関係を持ち続けていた。とりわけ義理の妹で、1940年代ころ食事に招いた客と気前よく酒を酌み交わし、客を泥酔させること名を馳せた、社交的なティティ・ポーカーク（Titi Pauker）とは良好な関係を持ち続けた。ギィとの関係については、断言することは難しいと言えようが、マルセル・ポーカークの血縁を遡ってみると、ギィ・ポーカークが、マルセルの父方のおじの一人の息子、つまりマルセルの従兄弟にあたる可能性はありそうだ<sup>10</sup>。

ギィ・ジーン・ポーカークは、ルーマニアの文書には、ジーン・ポーカークとして記載されていたようだ。「ギィ」はルーマニアで珍しい名前だが、フランスでは一般的な名前である。一方、「ジーン」は両国で一般的な名前として通っている。ポーカークは、1947年10月にブカレストを離れてパリに到着するまで「ジーン・ポーカーク」として知られていたが、パリでパスポートを「紛失」して無国籍になり、1948年4月の米国へ移住する頃からフランス的な名前「ギィ」を加え、ギィ・ジーン・ポーカーク、ギィ・J. ポーカーク、あるいは単にギィ・ポーカークと名乗り始めたようだ。このように部分的改名をしたことで、新しいアイデンティティをもって再出発できたかは不明だが、これによって、ポーカークの

<sup>8</sup> 筆者は、ポーカークに繋がるいかなるユダヤ人との人脈も確認できなかった。このことは、ギィ・ポーカークの家系が、ユダヤ系だったとしても、彼自身は敬虔なユダヤ教信者ではなく、宗教に興味もなかったことを示唆している。

<sup>9</sup> アナ・ポーカークについてはLevy (2001)を参照。

<sup>10</sup> 親戚筋ということになれば、数々の伏線の説明が容易になる。例えば、マルセルの一族は何世代にもわたって完全にルーマニア化した「世俗的ユダヤ人」であること（Levy 2001: 23）、パリとの人脈を持っていること、また1940年代の外交関係に利害と関心を持つこと（これによりアナは閣僚の一人となった）などである。

過去を辿ることが難しくなったことは紛れもない事実である。

筆者が発掘した、ジーン・ポーカーとほぼ確実に何らかの繋がりを持つもう一人のポーカーは、アルベルト・ポーカー (Albert Pauker) という人物である。彼は、親ナチス政権を倒した王党派のクーデターの後の1944年に<sup>11</sup>、ジーン・ポーカー (米国移住後はギイ・ポーカー) とその最初の妻が関わっていた会社設立を、法的な面で支援しており、そのことからジーン・ポーカーの近親者である可能性が高いと考えられる<sup>12</sup>。ギイ・ポーカーの最初の妻は、社会階層的にみても出所の異なる、ある意味「異なる文化出身」のルーマニア人であり、また職業上の公文書でも旧姓を使用しており、ポーカーの名を一度も用いていない。彼女は、ビジネスに長けていたようで、長期にわたり高級時計ロンジンの代理店を経営していた。1943年のバルカン諸国の他の代理店と連絡を取っていたことを示す資料でも旧姓を名乗っており、1943～44年、1948年にロンジンの代理店を経営していたことを示す資料でも、旧姓で登記している<sup>13</sup>。

ポーカーはブカレスト大学で社会学を専攻し、1938年に「マスメディアの社会的機能」(文学士)、1939年に「中立国の責務に向けて」(法学士)と題する二つの卒業論文を執筆し、二つの学士号を持っていた。1946年には、「国際連盟と国際連合：その機能の比較分析」という学位論文で政治経済学の博士過程を修了し、同年にはブカレスト弁護士会 (Bucharest Bar) に入会したとされる<sup>14</sup>。大学時代から、ポーカーはAP通信 (1936～40)、引き続きUP通信社 (1946～47) に掲載する記事を書いていたようである。また、後に出た経歴リストには現われないものの、1952年の論文で、ポーカーは「ディミトリエ・グスティ (Dimitrie Gusti, 1880-1995) 教授のルーマニア社会研究所と緊密な関係にあった」と記述している<sup>15</sup>。ディミトリエ・グスティは、20世紀ルーマニアを代表する社会学者であった。フィールドワークを駆使した応用社会学のエキスパートで、さまざまな専門分野の学生と研究者の混成研究班を組織し、地方の農村へフィールドワークに送り、農村生活の改善と農民の国民統合に努力を惜しまなかった。政治的にも活発で、さまざまな政治思想や活動に傾斜している学生たちと親しく、グスティのルーマニア社会研究所は、知識人のハブとなっていた。1930年代は、教育大臣を務め、1930年代後半から1940年代初頭の政治に深く関わった。一時ファシスト思想を支持したと攻撃された時期もあったが、戦後まもなく共産党と共闘を組んだ<sup>16</sup>。

ポーカーが1948年にアメリカに亡命したことは広く知られているが、戦争で疲弊したヨーロッパを離れた詳細は未だ闇のなかである。多くのユダヤ系ルーマニア人が外務大臣アナ・ポーカーの手配で、ルーマニアからイスラエルに渡った一方で、ギイ・ポーカーはオーストリア経由で出国し、1948年4月30日にパリで、通常の移民ビザとは異なる特別なビザを受け取り、1948年5月28日に、客

<sup>11</sup> *Regatul Romaniei Monitorul Oficial* (Anul CXII, Nr. 225 [29 Sept. 1944]) を参照。https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/a2/Monitorul\_Oficial\_al\_Rom%C3%A2niei\_Partea\_a\_2-a\_1944-09-29\_nr\_225.pdf, 2016年2月10日閲覧。

<sup>12</sup> 筆者は、アルベルト・ポーカーについて、あるいは他の人との関係について、これ以上の情報を得られなかった。

<sup>13</sup> [http://www.ceasuripentruromania.ro/ceasuri.php?id\\_article=152](http://www.ceasuripentruromania.ro/ceasuri.php?id_article=152), 2015年9月13日閲覧。

<sup>14</sup> この情報の大半は、1976年の米国議会での証言とともに出版された。(Pauker 1976:147) 筆者が調査した文書の内容は、丁寧かつ詳細な教育歴・職歴の記載があるが誤りが少ないとは限らず、誤った説明を含んでいる可能性がある。

<sup>15</sup> Pauker 1951: 85。

<sup>16</sup> *Radio România Internațional, The History Show, "Sociologist Dimitrie Gusti (1880-1995),"* [http://www.rri.ro/en\\_gb/sociologist\\_dimitrie\\_gusti\\_1880\\_1995-1957](http://www.rri.ro/en_gb/sociologist_dimitrie_gusti_1880_1995-1957), 2016年2月27日閲覧、および Wikipedia, "Dimitrie Gusti" ([https://en.wikipedia.org/wiki/Dimitrie\\_Gusti](https://en.wikipedia.org/wiki/Dimitrie_Gusti)) 2016年2月27日閲覧。

船 SS ワシントン号でアメリカに上陸した<sup>17</sup>。マーナ・オリバー（Myrna Oliver）記者による『LA タイムズ』の追悼記事は、ソビエトによる権力奪取が開始されたとき、ギィ・ポーカークはルーマニア国際問題研究所の書記長と季刊誌『ロシアン・アメリカン・レビュー』の編集者になり、共産主義者が廃刊に追い込むまで編集者として同誌に勤め続けたと記している。また、ポーカークが「アメリカ合衆国友の会」を設立したが、ディミトリエ・グスティは似たような名前の「ソ連友の会」に関わっていたという興味深い記述も残している。彼のルーマニア出国は、アナ・ポーカーク外相の政策に従えという圧力に刺激されたためか、あるいは「ルーマニアの中心的都市から階級の敵および政敵を追放せよ」という要求——アナはこの政策に反対した<sup>18</sup>——に恐れをなしたためだったのであろう。いかなる理由にせよ、彼はメアリー・クリーブランド（Mary Cleveland）の言うところの「夜逃げ」を決行し、夜中に忽然と姿を眩まし、ハンガリー国境を越えてオーストリアに入った可能性が高い<sup>19</sup>。

ポーカークとその妻は幸いにも、1948年難民法（Displaced Persons Act）のもと無国籍民としてアメリカに入学できた。難民法は彼らの入国後、「偶然にも」一ヶ月ほどで大統領が署名し成立したもののだが、本国ルーマニアで共産主義当局による彼の「追放」が差し迫っているという噂と、ブカレストから逃れてきたという話に加え、奇妙なタイミングで設立された「アメリカ友の会」という都合の良い名前の組織の設立にも関わったことも考慮すれば、彼らは完璧に法の要件に適合していた<sup>20</sup>。「偶然」の幸運のみではなく、鋭い洞察力を備え持った31歳のポーカークは、米国移住後の生活設計をすでにしていたかのように、亡命前にハーバード大学院に出願し、入学許可まで得ていた。共産国家での迫害を「急遽」逃れてきた人間にしては、驚くほどの用意周到さである。彼の生い立ちとブカレストからの脱出は、現在流布している内容より、はるかに複雑な背景があることは明らかであり、このようなポーカークの「脱出劇」を、単に若く知的で機転が利いていたという説明だけで済ませることはできないであろう。アメリカへ行くタイミング、通常のユダヤ人ビザとは異なる入国ビザを取得するための理由、新しい難民法のもとで難民としての要件となりそうな基準、そして大学院への入学許可に関して、アメリカ行きを準備していたポーカークに指南した親切な人間がいたのだと、容易に推断できる。問題は、誰が何のためにそうしたのか、ということだ。

周到な「脱国」、移住先アメリカでの大学院入学が滞りなく進められたことに対する説明としては、戦争中のポーカークの活動やルーマニアでの政治活動のためと推測することは可能である。あるいは、ルーマニアを離れアメリカに亡命したという行動自体が、彼が東西冷戦の闘士となる可能性がある人間だとアメリカ側が考えたという可能性もある。しかしながら、「脱出劇」の舞台裏を解明するためには、ポーカークと米国の接点となる人物やその活動を検証する必要がある。注目すべきは、第二次世界大戦中の混乱したルーマニアで、1944年から米国政府がブカレストに設置した戦略情報局局長フランク・ガーディナー・ワイズナー（Frank Gardiner Wisner）の存在であり、彼の経歴である。ワ

<sup>17</sup> 国ごとに割り当てられる移民数の枠外での移民ビザ（Non-quota visa）を取得した。“List or Manifest of Alien Passengers for the United States, List 18, Passengers sailing from Le Havre, Franc, 28 May, 1948” ; Elliot (2010: 46) も参照。彼らは続いて永住権を1953年7月31日の両院合同決議（p. B126-8）によって与えられた。<http://www.gpo.gov/fdsys/pkg/STATUTE-67/pdf/STATUTE-67-PgB126-3.pdf> 2015年9月13日閲覧。

<sup>18</sup> Levy 2001: 87。この場合、彼はアナ・ポーカークに守られたとも言える。

<sup>19</sup> Cleveland 2004: 16。

<sup>20</sup> 上記乗客名簿にある手書きのメモを参照。「アメリカ友の会」についての主張は広く繰り返された。ポーカークの死後、オリバーはこの情報をより新しい事実と共に再度強調した。

イズナーは、独立後のインドネシアに無関係の人物ではなく、インドネシア革命共和国政府 (P.R.R.I.) 反乱に関わった学生たちにとっては、秘密作戦に関わった CIA 企画部副部長として記憶されているであろう。このワイズナーは、ブカレスト支局の局長の後、ドイツへ転勤し、のちに CIA 長官になるアラン・ダレス (Allan Dulles) の下で働いた。ワイズナーは、戦略情報局の活動を通じブカレストに多くの知識人と知己となったし、ドイツでも同様であった。ヨーロッパで多くの人脈を持つ彼は、戦後ドイツ人やおそらくブカレストの知識人たちが、ソ連の強制労働収容所に送られることに対して米国政府が介入・阻止しなかったことに非常に失望し、諜報部を辞任した。ワイズナーは、短い間ではあったが、ウォール・ストリートで政界・官界に関わらず「慎しく」暮らしていたが、その後、1947年に国務省に入省することとなる。ワイズナーは、すぐに西欧の難民キャンプを視察し、その後国務省に研究グループを立ち上げ、冷戦期の外交に備えるため、避難民をリクルートする作業に取り掛かった<sup>21</sup>。黎明期の CIA、国務省とワイズナーが、共産主義体制に対する潜在的嫌悪を持つあらゆる人間をリクルートするよう働きかけた結果、多くの元ナチス党员を含めた幅広い人間が、米国へ移民することになった。ワイズナーの足跡から、ポーカーと知己であったことは推測できるものの、現在の限られた資料からは推測の域を出ない。しかしながら、ポーカーの亡命が、偶然の結果であろうが、「リクルート」された結果であろうが、ポーカーの主張する「政治的迫害」について詳細な情報をアメリカの官僚に提供することを求められたであろうし、彼の傑出した名前は政府官僚の目に留まったであろう。

アメリカ亡命直後、ポーカーはハーバード大学大学院で研究を始めた。入学当初、後に博士論文で取り上げるインドネシアも含めて、特定の国や地域を研究対象としていなかった。しかしながら、彼の故郷であるルーマニアに関する研究に関しては、ルース・ベネディクトが第2次世界大戦中、戦時情報局の調査としてルーマニア文化について著した研究に対して批判的な学術論文を発表<sup>22</sup>、その後「ヨーロッパのための経済委員会 (The Economic Commission for Europe)」と題して修士論文を仕上げた。ポーカーは地域研究に対する興味は当初から薄く、特に、東欧研究からは、修士論文以降徐々に距離を置くようになった<sup>23</sup>。

ポーカーは政治学分野における博士課程を、当時政治問題として注視されていたことに焦点をあてた「低開発国における進歩の障害：政治的考察 (Obstacles to Progress in Underdeveloped Countries: Some Political Considerations)」と題する学位論文で、1952年に修了した。ハーバードの大学院は、ポーカーにとって学術的な重要性を持っているだけではなく、ヘンリー・キッシンジャー (Henry Kissinger) やズビグネフ・ブレジンスキー (Zbigniew Brzezinski) など、その後30年間政治の表舞台で活躍する人物とネットワークを築いたことでも貴重な場であった。更に、戦争中からの人脈で、もう一人の生涯にわたる仲間であり、思想と価値観を共有していた重要人物、日本研究者ロバート・A. スカラピーノ (Robert A. Scalapino) とも、ハーバードで再会したようである。スカラピーノは、ポーカーが入学した時期の1948年にハーバードで博士号を取得したが、しばらくハーバードで教員を務めていた。1949年にカリフォルニア大学バークリー校政治学部に職を得ることとなった。

<sup>21</sup> ワイズナーと彼のブカレストにおける活動については、Rashke (2013) を参照。

<sup>22</sup> Pauker 1951.

<sup>23</sup> 彼の二番目の妻エヴァもまた彼は「東欧に関係するものには関わろうとしなかった」と証言している (Elliot 2010: 46)。

後の話ではあるが、ポーカーは、まるでスカラピーノの敷いた轍をたどるかのようになり、ハーバード大学からカリフォルニア大学バークリー校へ転職していくのである。

ポーカーは博士論文を仕上げたのち、インドネシアへの関心を高めていった。奇しくも時を同じくして、マサチューセッツ工科大学（MIT）に本部を置く、インドネシアを研究対象とした新しい研究プロジェクトが立ち上がった。MIT とは名ばかりで、研究や企画に携わる研究者の多くが、ハーバード大学かアメリカ合衆国政府の関係者で占められていた。これは、時に「掛け持ち」したポーカーの職歴上の三つの時代へ深い関係を持ち、この MIT インドネシア・プロジェクトによって彼は転身を重ね、さらには主要インドネシア人と人脈を構築し、彼らに多種多様な面で影響をあたえることとなった。ポーカーの三つの時代というのは、第一に、フォード財団の助成を受けて MIT とハーバードで研究・教育活動をした時代、第二に、1956～63年にバークリーで政治学を教授した時代、そして第三に、ランド・コーポレーションで政府へのコンサルタント業務をした時代である。特に、ランドでの活動は、1960年前後に彼が上級研究職員に任命されると共に極めて重要になった。1960年代後半、ポーカーのアメリカ政府との繋がりが強まり（後述）、時を同じくしてアメリカとインドネシアの繋がりがスハルト新体制の成立と共に変化したことで、彼の研究の性質も変化していくこととなる。

1952～56年はポーカーの職歴の最初の時代であり、彼はハーバード大学とラドクリフ・カレッジで教鞭を執りつつ、1953～56年には MIT 国際研究センター（Center for International Studies: Cenis）に設けられたインドネシア・プロジェクトに助手として参加していた。このプロジェクトは、インドネシアの経済停滞の原因を検討することを目的とし、Cenis 創立と同時に立ち上げられ、Cenis が最も力を入れた研究プロジェクトの一つであった。Cenis 創立には、MIT 学長、副学長を始め多くの重鎮が関わっていたにも関わらず、まだ管理職としては年若い 39 歳の MIT 政治学教授マックス・ミリカン（Max Millikan）が、センター長として就任している<sup>24</sup>。ミリカンは、国際研究センター開設一年前の 1951～52 年、一年という短期ではあるものの CIA へ出向しており、ミリカンが CIA から戻るのを待つかのように、Cenis が設置され、しかも 1952 年から 2 年間は CIA がその主たる財源であった。その後の財源も途切れることなく、1954 年からは主たる財源がフォード財団に代わるが、CIA は引き続き陰に日向に支援を続け、CIA の肝煎りで始まったセンターであったことは疑いない。このセンターの中心的研究プロジェクトに関わったポーカーは、インドネシアでの研究調査のためフォード財団から研究助成を得た<sup>25</sup>。こうして彼はインドネシアへ赴き、主に西ジャワとジャカルタに滞在したが、教員としての仕事や、幼い子供のいる家庭事情から、1955 年に半年インドネシアに滞在するのみに留まった<sup>26</sup>。

インドネシアの経済停滞の原因に関する MIT 国際研究センター（Cenis）プロジェクトを通じて、ポーカーは数多くのインドネシア研究者と知り合った。この中には、カナダ人経済学者で、MIT イ

<sup>24</sup> MIT 国際研究センターは 1952 年に設立されたが、センターのウェブ・サイトによれば、設立後二年間、その主たる財源は CIA からのものだった。CIA. "Origins of the Center," [http://web.mit.edu/cis/pdf/Panel\\_ORIGINS.pdf](http://web.mit.edu/cis/pdf/Panel_ORIGINS.pdf) (2016 年 3 月 19 日閲覧)。

<sup>25</sup> MIT のインドネシア・プロジェクトは 1953～54 年にフォード財団の助成金を得、続けて五年間の延長をしたため (Higgins 1992: 74-5)、この研究助成についてはまだ不明である。そのため、ポーカーの「研究助成」は個人的なものであったか、あるいは単に MIT インドネシア・プロジェクトの一部でこの二つの助成期間をまたがっていただけなのかもしれない。

<sup>26</sup> Pauker 1956。ポーカーと彼の最初の妻は、1951 年に子供を一人もうけた。2002 年、ポーカー (Pauker 2010) は、以前の発言を翻し、1955 年に丸一年インドネシアで過したと記している。

インドネシア・プロジェクトを率いるベンジャミン・ヒギンズ (Benjamin Higgins), ルース・マクヴェイ (Ruth McVey), ダグラス・パウ (Douglas Pauw) など, すでに研究経験のある専門家, そして大学院生だけのフィールド調査班に加わっていた, 当時ハーバード大学やラドクリフ・カレッジの大学院生だったクリフォード・ギアツ, ヒルドレッド・ギアツ夫妻 (Clifford and Hildred Geertz), ロバート・ジェイ (Robert Jay), エドワード・ライアン (Edward Ryan), アリス・ドューイ (Alice Dewey), ドナルド・ファッグ (Donald Fagg) がいた<sup>27</sup>。この時期にポーカーが他の研究者とどれほど親しくしていたかは不明だが, バンドウンにおけるアジア・アフリカ会議の経済効果について, ベン・ヒギンズと共著しており, クリフォード・ギアツら大学院生が東ジャワのパレ (Pare) で行なった調査を計画段階で手助けをしていたことから, これら研究者との交流があったことは確かだ。更にポーカーの研究熱心さはその資料の集め方に反映されており, 当時まだ大学院生であったギアツの報告書も含め, 数多くの資料を大切に所蔵していた<sup>28</sup>。有名な, パレにおけるモジョクト・プロジェクト (Modjokuto project)——これはディミトリエ・グスティの混成フィールド調査チームに驚くほど類似している——に加わるよりは, ポーカーは政治経済の研究に打ち込み, 政治的, 経済的, 軍事的中心により近いジャカルタとバンドウンに留まった。しかしながら, モジョクト・プロジェクト以外のインドネシア・プロジェクトに関していえば, ベンジャミン・ヒギンズは効果的に運営できず, 研究者たちはうまく連携できず, 共同プロジェクトは, 全く機能しなかった。フォード財団ジャカルタ・オフィスの所長マイク・ハリス (Mike Harris) にとって, これは苛立ちの種であり, 1955 年 5 月の書簡で, そのプロジェクトが「さっさと終って, 彼らが皆帰国してしまえば」良い, とまで記している<sup>29</sup>。

1956 年にポーカーは, カリフォルニア大学バークリー校政治学部助教の職に就き, 1959 年 7 月に准教授に昇格<sup>30</sup>, 1960 年 7 月の東南アジア研究所創設当初から所長に就任し, バークリーを辞任する 1963 年まで所長を務めた。バークリーは当時フォード財団の支援を受け, インドネシア大学からインドネシア人留学生を受け入れるインドネシア大学プロジェクトの連携大学であった。これに関して, ポーカーはインドネシア大学プロジェクトの責任者ではなく, 政治学部に所属していたためこれらインドネシア人大学院生たちの第一指導教官となることもほとんどなかった。しかし, 数少ないインドネシア専門家の一人として, 学生や教員の多くと接触していただろうし, 実際, 非公式の懇親会 (後述) を催していた。バークリーでの最初の四年間, ポーカーはおそらくインドネシアには極めて短期間の訪問しかできなかっただろう。教育やその他の活動 (例えば 1958 年太平洋問題調査会ラホール会議への参加のためパキスタンへ出張するなど) のため, 研究費はあったとしても, まどまった時間がなくインドネシアへ行く機会が減ったからである<sup>31</sup>。それでも 1958 年には外部の研究資金を獲得しインドネシアでの研究を試みたようだが, 結局, ジョン・アリソン (John Allison) 大使や大

<sup>27</sup> "News of the Profession," *Far Eastern Quarterly* 12,4 (August 1953)。

<sup>28</sup> Geertz (1963: vii) およびフーバー研究所 (Hoover Institution) がオンラインで公開している "Register of the Guy Jean Pauker Papers, 1928-1996" を参照。

<sup>29</sup> Bresnan 2006: 76。

<sup>30</sup> 偶然にもポーカーは経済学部で日本専門家のヘンリー・ロゾフスキー (Henry Rosovsky) と同時に准教授に昇格した [UC *University Bulletin* Vol. 8, no1 (July 6, 1959): 4]。ロゾフスキーはバークリー在籍中に多くのインドネシア人を指導した。因みにロゾフスキーは, 後にハーバード大学の学長になる。

<sup>31</sup> テニユアを取るまでの時期, 家庭生活は困難をきたしていたのであろうか, 1960 年になる以前彼と妻は離婚した。

使館員と、1955年選挙について情報交換をする程度の期間しかジャカルタにいらなかった<sup>32</sup>。

パークリーに勤務する一方で、ポーカーは、南カリフォルニアのサンタ・モニカ・ビーチが眼下に広がる広大な敷地に、いくつもの研究棟が立ち並んでいるランド・コーポレーションで、東南アジア部門のコンサルタントとしても働き始めた。ポーカーがランドと関係を持ったのは1958年、彼がCIAと直接接触をしたと、本人が述懐している同じ時期に始まったようだ<sup>33</sup>。しかしながら、1958年の発表や出版論文は、ランドの助成研究の成果であり、このこと自体が1958年以前からランドと関係があったことを示唆している。

ランドは、「冷戦の申し子」として成長した特殊な研究機関である。元々はアメリカ陸軍航空部隊(U.S. Army Air Corps)とダグラス・エアークラフト社との共同事業として、平時における民間企業、学術専門家、大学、政府機関、そして軍のあいだの協力関係を後押しすることを目的として設立された。1945年10月1日、陸軍航空部隊総司令官H. H. アーノルド(H. H. Arnold)、MITに所属し戦争省長官のコンサルタントを兼業していたエドワード・ボウルズ(Edward Bowles)、ダグラス・エアークラフト社社長ドナルド・ダグラス(Donald Douglas)、そして他のダグラス社の技師二人が会い、プロジェクト・ランドを設立した。1948年までにスタッフは200人にまで増加し、同年5月14日にはダグラス・エアークラフト社から切り離されて、独立した非営利組織となった

ランドが表面上、独立した組織となった頃から、フォード財団との繋りは緊密なものになった。このランドを改組する任務を与えられ、尽力したのがH. ローワン・ゲイザー弁護士(H. Rowan Gaither)であるが、彼は後にランドの会長、そしてフォード財団の理事長を歴任した。ランドに対するフォード財団の関わりは、多額の無利子ローンを融通することから始まり、民間ローンの保証人にまでなったことから、経済的に大きな後ろ盾となっていたことは明らかである。フォードの支援により、常勤研究員が軍事以外の研究をすることも可能となり、ランドの活動を拡大させることになる「ランド助成研究プログラム(RAND Sponsored Research Program)」が実現した。1948年時点では、数人の経済学者と心理学者のみを抱えるのみで、社会学者はほんの僅かしかいなかったが、このプログラムを契機に社会学者の募集を拡充していった。ランドはまた、プロジェクト・エアー・フォース(元プロジェクト・ランド)を通じて空軍との特別な関係は維持したが、同時に他の軍との繋りも保ち続けた。

ランドは、様々な政府機関のために、コンサルタント業務をするだけでなく、巨大研究プロジェクトを請け負っていた。ランドの仕事をつうじて、ポーカーはアメリカ政府の諸機関との結び付きを深めていった。彼は自らを、見識があり、顧問として有用な人物とするため、最新の政治問題へ注意を払い「何か起きている現場に」<sup>34</sup>いようとする自身の気質をつきつめることになった。1960年から彼

<sup>32</sup> Allison 1973: 305. ジョン・M. アリソンは日本語専門家としての教育を受け、外交官人生の一部としてアジアに赴任した。1953～57年に日本大使、そして1957年3月13日からインドネシア大使を歴任したが、ワシントンとの摩擦の結果、1958年1月29日、チェコ・スロバキア大使としてブラハに移動させられた。

<sup>33</sup> オランダ人ジャーナリスト、ヴィレム・オルトマンズ(Willem Oltmans)は、ポーカーは1957年にランドに加わったと断言しているが、おそらく誤りであろう。これは、ポーカーのランド/CIAとの関係に関して、オルトマンがずっと後になって得た情報に基づくものである。しかしながら、ポーカーがランドからインドネシア調査の助成金を受けていた可能性はある(Oltmans 2003:20)。1957年のフィールド調査に基づく1958年の論文に対するポーカーの説明もまた曖昧である(Pauker 1958)。

<sup>34</sup> Elliot (2010: 49)。

は、ランドの社会科学部門の上級研究員となり、およそ三年間、カリフォルニアの北と南に位置するパークリーとロサンゼルスを行き来する生活を送った<sup>35</sup>。

彼の研究足跡の変化は、以下の示す 1951～71 年の出版物の抜粋からも明らかである。(表の中で太い実線で表した箇所は変化の表れた時代である)

1951	The Study of National Character Away from That Nation's Territory [国民の領土から離れた国民性に関する研究]
1952	Obstacles to Progress in Underdeveloped Countries: Some Political Considerations [低開発国における進歩の障害：政治的考察]
1955	Comparative Politics of Non-Western Countries (co-authors Lucian Pye and George McT. Kahin) [非西欧諸国の比較政治 (パイおよびケイヒンとの共著)]
C.1955	Economic Implications of the Asia-Africa Conference and its Aftermath (co-author Benjamin Higgins) [アジア・アフリカ会議とその後の経済的意義 (ヒギンズとの共著)]
1958	Indonesian Images of Their National Self [インドネシア人の国民としての自己に対するイメージ]
1958	The Role of Political Organizations in Indonesia [インドネシアにおける政治組織の役割]
1959	Southeast Asia as a Problem Area in the Next Decade [来たる 10 年における問題地域としての東南アジア]
1960	Recent Communist Tactics in Indonesia [インドネシアにおける最近の共産主義者の戦略]
1960	The Role of the Military in Indonesia [インドネシアにおける軍の役割]
1962	Indonesia: Towards Development or Expansionism? [インドネシア：開発に向かうか、拡張主義に向かうか？]
1964	Communist Prospects in Indonesia [インドネシアにおける共産主義の展望]
1964/5	Indonesia in 1964: Toward a "People's Democracy" ? [1964 年のインドネシア：“人民民主主義” へ向かうか？]
1967	Indonesia in 1966: The Year of Transition [1966 年のインドネシア：移行の年]
1967	Toward a New Order in Indonesia. [インドネシアの新体制に向かって]
1967	Indonesia's Convalescence [インドネシアの回復期]
1968	Indonesia: The Age of Reason [インドネシア：理性の時代]
1968	After Turmoil, the Upward Climb [混乱の後、上昇へ]
1968	How and Why Indonesia Should Receive Economic Aid from the United States [どのように、そしてなぜインドネシアはアメリカから経済援助を受けるべきなのか]

<sup>35</sup> 最初の妻との離婚から時を経ず、1960 年にポーカーは、マックギル大学を卒業 (1959) し、カリフォルニア大学パークリー校政治学研究科に入学した。ポーランド生れの女性と再婚した。彼女はそこで、ロバート・スカラビーノを指導教官として「民主主義という実験の失敗：1955～58 年のインドネシア (The Failure of a Democratic Experiment: Indonesia, 1955-1958)」(1962) と題する修士論文を仕上げた。彼女もまた 1960 年代にランドに勤務した (Elliot 2001; *LA Times*, November 16, 2008)。

1968	Political Consequences of Rural Development Programs in Indonesia 〔インドネシアにおける農村開発プログラムの政治的帰結〕
1969	The Rise and Fall of the Communist Party of Indonesia 〔インドネシア共産党の隆盛と凋落〕 <sup>36</sup>
1970	The Gestapu Affair of 1965〔1965年9月30日事件〕

ポーカークの著作リストは、1960年までに一般開発研究から、インドネシアと東南アジアに関連する全般的な政治分析と記述へ、主題が移行したことを示している。1960年頃からは、1958年の自身の政治組織の分析から出発してインドネシア共産党とインドネシア国軍に関する、そしてインドネシアの最新事情に関する描写的な著述に移行したことが明確である。1965年以降は、クーデター以降のインドネシアについて楽観的な記述に移行し、共産党員と他の関連する農村人口の一部の虐殺を正当化した。また、アメリカ政府に直接関係する政治問題についての議論にも着手した。これをブディアワンはアメリカ政府に対する「方向づけ」であると評したが<sup>37</sup>、しかしまたそれはしばしば捻れを伴うものでもあった。この時期のポーカークの議論は、考えを同じくしている者に語りかけているようであり、つまりアメリカ政府にいる彼の読者たちの期待に合わせて設えてあり、それゆえに彼の語りにおける重大な局面で証拠を必要としなかったり、明らかに操作された証拠を援用したりしているのだ。1960年代末から1970年代初頭のポーカークの著作には、引き続いてそのような特徴を持つものや、米国を中心とした一般読者に「消費」されることを念頭にしたプロパガンダと見なせるものさえある。

### ポーカークのインドネシアおよびインドネシア人との関係

ポーカークにとってインドネシア人と知り合う最初の重要な機会は、ハーバード大学とMITのプロジェクトの場であった。そこではフィールド調査を準備するプロジェクト・メンバーへのブリーフィングのためにインドネシア人専門家を招いていた<sup>38</sup>。1951年にはインドネシア大学経済学部の教授となり、1957年以前に幾つかの内閣で閣僚を務めていたスミトロ・ジョヨハディクスモ（Sumitro Djojohadikusumo, 1917-2001）がMITのブリーフィングに数回参加している。モハマド・サドリ（Mohammad Sadli, 1922-1998）を含め、インドネシア大学からの留学生も、ハーバードで開催されたキッシンジャーの夏期国際セミナーに参加するため、ボストンに来ている者がいた<sup>39</sup>。サドリはまた1954～56年にMITの大学院で学び、1956～57年にはカリフォルニア大学バークレー校の大学院でも学んでいた。以前「MITのポーカークと同じ時期に同じ大学にいた」ことで、二人は良い友人となった<sup>40</sup>。

<sup>36</sup> 1967年にアメリカ空軍のために執筆され、1969年に二度出版された。一度はランドによって、もう一度はロバート・スカラピーノ編の論文集においてである。

<sup>37</sup> Budiawan 2006: 651.

<sup>38</sup> Ransom (1970)。

<sup>39</sup> Ransom (1975)。このプログラムはCIAが様々なトンネル財団経由で一部資金援助していた。このことは、当時キッシンジャーも知らなかった事実だろう。

<sup>40</sup> Ransom 1970: 5.



1952 年頃のスマイトロ・ジョヨハディスクモ (Wikipedia, “Sumitro Djojohadikusumo”, 2016 年 2 月 28 日閲覧)

ポーカークが MIT, ハーバードやバークリーで接触したインドネシア人と、インドネシアで接触したインドネシア人とは、概ね重複していたが、国家開発企画局 (Biro Perantjang Negara, 現在の国家開発企画省/国家開発企画庁 Kementerian PPN/BAPPENAS の前身) 局長“ココ”・スジャトモコ、スジャトモコの妹であるミリアム・ブディアルジョとその夫アリ・ブディアルジョ、またインドネシア大学経済学部の教授陣と知り合ったのはインドネシアにおいてであったようだ<sup>41</sup>。ベンジャミン・ヒギンズは、1952 年の国家開発企画局と 9 人の外国人専門家の協力プロジェクトの長を務めたが、ポーカークは、その頃ヒギンズの部下としてインドネシアを訪問した際に、スジャトモコや他の重要なエコノミストに出会っていた可能性が高い<sup>42</sup>。インドネシアで友人を見付けたのは彼だけではなく、スジャトモコは当時インドネシアで働いたり研究したりしていた欧米の研究者のほとんどと懇意であったようだし、スマイトロやインドネシア大学経済学部教授陣も 1950 年代には外国人研究者と親しく交流していた。ポーカークは、クレア・ホルト (Claire Holt) や無名のインドネシア人数人と共に、スジャトモコが彼の所有する出版社の十周年記念で「国民として、国家としての我々の姿」についての作文コンテストを開催するのを手伝った<sup>43</sup>。スジャトモコと、スタントという人物だけには、ポーカークは 1959 年の論文「来たる 10 年における問題地域としての東南アジア」において謝辞を述べている<sup>44</sup>。こうした交流はほんの始まりに過ぎなかった。ポーカークはスジャトモコやそのグループの

<sup>41</sup> Ransom 1975: 3。ラムソンのこの著作は、主に典拠不明なインタビューに基づいているが、比較的信頼性が高い。アリ・ブディアルジョは、後にフリーポート・インドネシアの初代筆頭取締役 (Direktur Utama) になった。ミリアム・ブディアルジョは 1974～79 年にインドネシア大学政治社会学部の学部長となった。

<sup>42</sup> *Celebrating Indonesia*, p. 46。この本の著者たちはこれを MIT プロジェクトと言及しているが、このプロジェクトはスキマン (Sukiman) 内閣のときに承認されたものであり、おそらく、当時マックギル大学に所属していたヒギンズが選んだ 9 人のメンバーからなる国連プロジェクトだった。もう一人のメンバーであるネイサン・ケイフィッツ (Nathan Keyfitz) は、ウィジョヨ・ニティサストロ (Widjojo Nitisastro) を含む、学生グループの補助を得、東ジャワの都市マラン近郊のパレアルジョ (Balearjo) の村落調査を企画した。See Keyfitz 2004: Ch. 11-12。

<sup>43</sup> Lindsay and Liem 2012: 129-130; Pauker 1958。

<sup>44</sup> Pauker 1959。この論文は、ゼネラル・エレクトリック “Tempo” [Technical Military Planning Operation] 論文叢書のために書かれたものであるが、ランドや他の機関から資金援助を受けていた。スタントとはおそらく、西ジャワ出身で、後に新体制下で陸軍戦略予備軍 (KOSTRAD) 司令官に登りつめたスタント・ヒマワン (Soetanto Himawan) だろう。

人々に長期にわたり相当な影響を与えたようだ<sup>45</sup>。

ポーカークの政治研究会メンバーも、研究会開催の頻度も明らかではないのだが、彼は1956～63年にパークリーで学んだインドネシア人の多くを知っており、中にはアメリカに来る前から知っていた者さえいたようである。また、彼がパークリーを辞めたあとに留学してきた学生の多くも知っていたようだ<sup>46</sup>。たとえば、前述のモハモド・サドリは初期のパークリー留学生の一人であり、ウィジョヨ・ニティサストロ (Widjojo Nitisastro, PhD 1961) は、ポーカークが1957年、またおそらく1955年にもインドネシアで数度会っていたと思われるエコノミストである。1959年にパークリーでMBAを取得しているバルリ・ハリム (Barli Halim) とも面識があった。アリ・ワルダナ (Ali Wardhana, 1928-2015) は、1958年にインドネシア大学経済学部を卒業しているので、ジャカルタでポーカークに会っていた可能性がある。ただし、ほぼ確実なのは、アメリカに学位取得のため送られたインドネシア教員の代わりに、臨時教員としてフォード財団が送ったアメリカ人講師のもとでアリが学んだことであり、講師のほとんどがパークリーから派遣されていたことからポーカークがその中にいたことは容易に推測できる。その後、アリ・ワルダナは修士号を1961年に、続けて1962年に経済学博士号をパークリーで取得していることから、二人はパークリーで互いを知っていたはずである。もう少し後の世代に属するエミル・サリム (Emil Salim) はパークリーで1964年に博士号を取得しており、軍と強力な結び付きを持つ学者ジュウォノ・スダルソノ (Juwono Sudarsono) は同時期にパークリーで政治学博士号を取得している。これらのインドネシア人はスハルト体制期には主要大臣職、あるいは他の重要な地位を占め、新体制経済を生み出し維持するのを助けた。

インドネシア人エコノミストをパークリーに受け入れるにあたって、あるいは彼らの学術研究を指導するにあたって、ポーカークはさほど重要な位置を占めなかったと見られる。フォード財団のプロジェクトには、ジャカルタやパークリーに、直接、経済学に関連のある学者を数多く擁していたからである。1960年代初頭にポーカークがキャンパスを頻繁に離れていたこと、学術的関心が相違していたことも相俟って、ポーカークが彼らの教育に深く関わることはまずなかったと考えられる。彼らが自分の回顧録で、ポーカークに触れることがないのは、こうした理由からだろうが、彼らはポーカークが必要などときには面会できる人々だった。しかし、少なくとも1950年代後半にポーカークは留学生とその家族と、懇親会を開いていた。ただ以前からの知り合いで、その後30年間定期的に接触していたにも関わらず、ウィジョヨ・ニティサストロは、学業に専念していたということで、一度も出席しなかった<sup>47</sup>。

1950年代を通じて、ポーカークは徐々にインドネシア陸軍の将校たちと知りあい、また尊敬するようになったことが知られている。中でもスワルト (Sewarto) 大佐とはとりわけ親しくなったと言われる。スワルトは、強硬な反共産主義者で、インドネシア社会党に近く、1956年のズルクフリ・ルビス事件に加担したこともあってスカルノの不興を買った反スカルノ派の将校だった<sup>48</sup>。スワルトは、

<sup>45</sup> G. レシンク (G. Resink) のインタビューの最後の言葉は、ポーカークがスジャトモコを引き寄せたという方向性について詩的に仄めかしている。(Mrázek 2002)

<sup>46</sup> ここでポーカークがパークリーの職を辞めたことは重要である。それが彼のキャンパスにいるかどうか、そして1963年以降多くの接触があったかどうかに関係するからである。

<sup>47</sup> Pauker 2010: 394.

<sup>48</sup> このクーデター未遂については、McVey 1971 および Sundhaussen 1986: 96-101 を参照。

陸軍指揮幕僚学校 (Sekolah Staf dan Komando Angkatan Darat, SESKOAD) を、インドネシア社会における陸軍の役割を拡大するための重要な組織に改編するにあたり主要な役割を果たした。社会党寄りのスワルト大佐は、1958～59年にアメリカのフォート・レベンワースの米陸軍指揮幕僚大学で学んだのち<sup>49</sup>、1959年にナスティオン将軍により SESKOAD の副司令官に任命され、1967年に亡くなるまで (短期のワシントン派遣はあったものの) SESKOAD に勤務した<sup>50</sup>。ポーカーにスワルト大佐を最初に紹介したのは、おそらく、独立戦争時のジョクジャカルタにおける経験から彼を知っていたモハマド・サドリだったと思われる<sup>51</sup>。おそらく、ポーカーがインドネシアに半年滞在した1955年、あるいはサドリがバークリーから帰国してインドネシア大学に博士論文を提出した1957年のいずれかの時期に紹介されたと考えられる。

スワルト大佐は、ポーカーが他の国軍将校たちと接触する要でもあった。スワルトが<sup>3</sup>、1962年にランドを招かれた後、SESKOAD をもっとランドのようなシンクタンクに発展させようと努め<sup>52</sup>、ランド訪問の成果の一つとして、ミリアム・ブディアルジョ、セロ・スマルジャン (Selo Soemardjan) からアメリカ帰りのインドネシア大学経済学者を、将校を教育するためのコサルタント・チームとして活用する決定を下したことを、ポーカーは例に挙げている。また、ポーカーとしては、スワルトと知り合ったおかげで、SESKOAD の職員との接触が容易になり、ポーカーの論文には、1950年代末から少なくとも1963年まで彼が定期的に SESKOAD の将校たちと会っていたことを示す部分がある。ポーカーと軍事歴史家ヌグホ・ノトサント (Nugroho Notosusanto) を結び付けたのも、彼らが既に他の機会に出会っていなかったなら、スワルト大佐だっただろう。

1960年代から1970年代初頭にかけてポーカーは定期的にジャカルタを訪問していたが、たいていは、1962年10月にインドネシア陸軍の顧問としてインドネシアを訪問した政府機関間民政支援顧問団 (Inter-Agency Civic Action Advisory Team) のような、米軍ないし米政府の作業部会の一員としてであった。こうした機会のおかげでポーカーは、一方ではインドネシアの官僚や将校と、もう一方ではアメリカの官僚や将校との関係を強化することができた。軍諜報部のリーダーであり、後にジャカルタを本拠地とするシンクタンク CSIS を設立することになるアリ・ムルトポ (Ali Moertopo) の文民の秘蔵っ子ユスフ・ワナンディ (Yusuf Wanandi) とポーカーが出会ったのも、まさしく1960

<sup>49</sup> スワルトの米陸軍指揮幕僚学校の在籍期間については幾つか異なる日付が示されてきたが、エバンズ (Evans 1989: 46) が在籍期間とその後の職階を付した卒業生名簿を紹介している。ヤニ (Yani 2007: 245-6) によれば、彼は SESKOAD に配置される前にアメリカに送られ、アメリカ滞在中に癌と診断され、片足を切除しなければならなかったということだ。また、ローリー (Lowry 2010: 48) は、彼が1963年に片足の切除をしたと言及している。

<sup>50</sup> Bourchier (2014: 113), Sundhaussen (1986: 244-5), Pauker (1968: 26)。

SESKOAD 司令官、スアディ・スロミハルジョ (Suadi Suromihardjo) 大佐 (1959～62)、とスディルマン (Sudirman) 准将 (1963～66) は、政治的、政策的重要性はなかった。スカルノは、スワルトが1956年のクーデター未遂に関与していたため、彼のスワルトへの昇級文書に署名することを拒否した。彼が大佐の階級を用いていたのは、陸軍第二副参謀長アフマド・ヤニ (Achmad Yani) 准将の権限においてであった (Sundhaussen 1986: 244-5)。

<sup>51</sup> Sadli 2008: 23。奇妙なことに、ウィジョヨ・ニティサストロの追悼論集 (Moh. Arsjad Anwar 2008) 全489ページのなかに、ポーカーの存在は触れられていない。

<sup>52</sup> Ransom 1975: 7。ラムソンは、ポーカーの主張を引用しているが、サドリの主張 (Sadli 2008: 23) では、インドネシア大学の講師は1957年から SESKOAD で教えていたし、ブルックスによると (Irwan 2005: 42 に引用された、ブルックスの1997年の修士論文)、モハマド・サドリ (Moh. Sadli) が1958年に最初に SESKOAD で教え、フォード財団がインドネシア大学に送った教師たちも SESKOAD で講義を持ち、1962年までに段階的に辞めていった。ここからポーカーの主張はランド訪問の重要性を誇張していると考えられる。

年代末のこの文脈においてであった (Wanandi 2013)。

米大使館員や、本国の米軍将校との親交の結果、ポーカーは渡米を考えていたインドネシア人将校の仲介役となり、また政治的に「望ましくない」人物をインドネシア国内の影響力ある職位から外すため、時折アメリカの大学へ留学させることも頼まれた。1958年中頃までに、アメリカには300人ほどのインドネシア軍人がおり、1953～65年の間にフォート・レベンワースの米陸軍指揮幕僚大学で学んだ全53人を含め、2800人の将校がアメリカで訓練を受けた。ポーカーは、米軍との関係を強めるにつれ、仲介役として「使える枠」を確かに持っていたのである<sup>53</sup>。その一つの例として、アブドゥル・シュクル (Abdul Syukur) 大佐の件が挙げられよう。“民族主義的”なアブドゥル・シュクルは、狂信的な反共産主義者のスケンドロ (Sukendro) 大佐の留学 (1960-63) 先でもある、ピッツバーグ大学留学を打診されたのである。結局、この将校は、この餌に喰いつかず、元の職に留まった結果スハルト体制により10年間投獄された<sup>54</sup>。問題のある将校をアメリカ留学という穏健な方法で排除する手伝いをしたことで、ポーカーはより高位の将校に、そして彼によって「助けられた」と感じたであろう個々の将校にも恩義を売ったことになった。

ポーカーと親交を結んだもう一人のインドネシア国軍将校は、“でぶっちょ” スミトロ (“fat” Soemitro) である。彼は、東ジャワ出身で1950年代半ばから末までバンドゥンに駐在し、1965～74年には主要な将校となった。スミトロはスワルトの友人、そしておそらく1950年代に出会っていたポーカーの友人を自認していた (Bresnan 1993: 144)。

ウィジョヨ・ニティサストロ、モハマド・サドリ、アリ・ワルダナ、スプロト (Subroto)、エミル・サリム、そしてコーネル大学留学から帰国するとインドネシア大学経済学部で経済学以外の講義を担当したセロ・スマルジャンなど、インドネシア大学とバークリーの主要エコノミストは、陸軍そして後に新体制政府の主要人物——最も重要なスワルトを含めて——とのネットワークを形成した。1957年頃から、インドネシア大学経済学部の教授陣が SESKOAD で教えはじめたようだが、1962年前後、ちょうどアメリカ留学第一期生の講師陣が帰国しはじめ、インドネシア大学や SESKOAD で教えていた外国人学者が帰国しはじめた頃から、インドネシア大学経済学部と SESKOAD の繋がりが本格化した。SESKOAD におけるこれら学者の講義が重要だったのは、陸軍将校が经济管理機能において効果的に機能するための訓練であったこと、そして将来の国家指導者たちに学者を結びつけたことの二点においてであった。このインドネシア大学のエコノミストのグループは、国立経済研究所 (Lembaga Ekonomi Nasional, Leknas) をはじめとした研究機関のメンバーとなり、1966年以降には、閣僚に任命された。ポーカーの持つ SESKOAD とインドネシア大学経済学部との人脈は、1960年代ポーカー、SESKOAD、インドネシア大学経済学部の三者間の関係を非公式な面でも強めていっただろう。

インドネシア国軍と共産党に関する1965年以前のポーカーの著作は、彼が確固とした洞察力を持っていただけでなく、彼のインフォーマントが極めて豊富な情報を持っていたことも証明している。インフォーマントの多くは、共産党に懸念を抱いていたインドネシア陸軍将校たちで、ポーカー

<sup>53</sup> アメリカに留学したインドネシア軍人については、Mrázek (1978) および Evans (1989) を参照。

<sup>54</sup> Roosa 2006: 195, n.29. スケンドロ (Sukendro) は、1965年、あるいはおそらくそれ以前から、アメリカ大使館および国防総省派遣陸軍武官ウィリス・G. エセル (Willis G. Ethel) 大佐にとって重要な接触先だった。

がインドネシア共産党との繋がりがなくとも、インフォーマントの情報で補完することができた。ポーカーは、国軍将校やインドネシア大学の知識人に加え、当然のことながら数多くの政治家とも会談を重ねていただろうが、共産党書記長アイディット (Aidit) とスカルノ大統領だけは別であった。面会の予約を入れることは困難をきたし、ようやく 1957 年夏、ウィレム・オルトマンズ (Willem Oltmans) の仲介で、東インドネシアへ公式訪問する途上のスカルノ大統領との面会が叶った。そして、それがポーカーがスカルノに会った一度きりの機会だった。

1964 年、ランドのフランク・コルボーン (Frank Collbohm) は、ベトナムに関する政府支援活動にランドが着手するべきか決めるため、ポーカーをワシントンに連れて行った<sup>55</sup>。こうして、1964 年からギィ・ポーカーはベトコンの士気を研究するプログラムに関わることになる<sup>56</sup>。最初の共著研究の最中、ポーカーはそのプログラムには十分な職員を確保するようにしたが、この人員配置自体が、ポーカーの主眼が、重要な時期にあったインドネシアではなく、ベトナムに注がれたことを示している。1965 年半ば以降、特に九月三〇日事件と軍が主導した左翼大虐殺ののち、ポーカーのインドネシアに対する研究姿勢は、非常に実践的な傾向を示し、米政府がインドネシアに関して何をすべきかといった政策決定に関わるようになった。これは、まさに彼の共和党内での外交政策顧問としての役割、そしてニクソン、フォード両大統領の共和党政府の時代に彼が顧問として持っていた様々な米政府機関との関係に適合したものだ。このことはほぼ確実にインドネシア人と彼の関係を変えていった。

1965 年のクーデターの後、当時在ワシントン、インドネシア大使館付武官だったスワルトは、再びランドに招かれ、ポーカーと「コーネル・ペーパー」について、またインドネシア国軍と 1965 年の事件について、より“建設的な”見解を出版することの重要性について議論したようだ。スワルトは、インドネシア国軍歴史センター長ヌグロホ・ノトサント (Nugroho Notosusanto) と、軍検察官イスマイル・サレー (Ismail Saleh) を執筆者に選び、彼らは然るべくランドに招かれ、そこで英語の原稿を仕上げた。1968 年に出版された *The Coup Attempt of the September 30 Movement in Indonesia* [1965 年 9 月 30 日運動というクーデター未遂] である。ヌグロホは、数年前にナスティオン (A.H. Nasution) 将軍にマディウン事件について書くよう依頼されたこともあり、インドネシア大学の歴史学科の講師であったという経歴に加え、彼の妻がスワルトの姪であったこともあり、このような著作に関わる最適任者であった。ポーカーが原稿執筆を手伝ったと言われているが、少なくとも著者たちに具体的な提案や相当数の批判をし、おそらくは、彼が実質上、第三の著者と言えるほど、英語原稿の手直しを手伝ったようだ<sup>57</sup>。

その後、ポーカーのインドネシアへの関わり方はさらに変化した。彼のランドでの仕事は米政府の取り組みを支持することであり、彼は東南アジア中を定期的に出張しなければならなくなり、その過程で、権力者たちと会う機会を持ち、懇意になることもあった。インドネシアにおいても、彼は調査

<sup>55</sup> Elliot 2010: 49.

<sup>56</sup> このプログラムのアプローチは、かつてポーカーが所属していた MIT-CENIS のインドネシア・プログラム、第二次世界大戦の心理戦争と根本的な考えが類似する。

<sup>57</sup> ポーカーの関与については、彼が原稿全体を代作した、この本で提示された「シナリオ」を考案した、あるいは(最終的には含まれなかったか) 数章を書いたということが示唆されているが、少なくとも彼の英語作文能力は頼りにされたであろう。Budiawan (2006) は、ほかの研究者の考えに同調し、ポーカーが「シナリオ」を考案したと考えている。

のために数人の要人に直接面会している。例えば、1960, 70, 80年代の出張調査の際、国家経済企画庁（Bappenas）のウィジョヨ・ニティサストロを訪問したことをポーカー自身の論文の中で言及している<sup>58</sup>。1967年のスワルト将軍の死は、ポーカーにとって、ひとつの親密な関係を失ったと同時に、最も信用のおける重要な情報源を失ったことを意味し、これを契機にインドネシア人のインフォーマントや仲介者の必要性が少ない、アメリカの防衛・治安当局が聞きたがっているような、宣伝めいたこと——インドネシア共産党が非難されるべき理由だとか新たな楽観的政策の正当化だとか——を書くようになった。開発計画の結果に関する1968年の“研究”でポーカーは、人口密度がギアツの言う農業のインポリューションを「越えた」ことと、共産党指導者が彼らの政治主張のために、農村の社会不安を利用する際に判断を誤ったと非難したことは、その一例である。

1970年代を通じて、共和党の外交政策顧問、そして政府顧問として、ポーカーはより全般的に東南アジアに関わり、エネルギー問題のような、インドネシアに関わらない他の諸問題に没頭し、インドネシアの人脈の重要性は低下したようだ。しかし、彼のインドネシアとの関わりが低下したとは言え、どうしてインドネシア内でポーカーはこれほどまで目立たなくなったのだろうか。彼は、実際にはそれほどインドネシア人たちと近しくもなく、容易に忘れ去られたということなのだろうか。もちろん、ユスフ・ワナンディは彼のことを忘れてはしていなかったけれども。あるいは、彼が冷戦構造に従って行動することを優先し、1970年代以降あからさまにCIAと結び付いたこと（ニュガン・ハンド銀行スキandal<sup>59</sup>のおかげで）は、インドネシア人の手に余ったということなのだろうか。しかしながらおそらくは“あのルーマニア人”は、個人々人をスハルトや陸軍と親密に繋がるように誘惑し、旨味のある多国籍企業や専売に関係するインドネシア政府との癒着に誘うことで、公正で民主的なインドネシアという夢を30年以上もの長きにわたり破壊し続ける悪魔（dajal）の役を少々頻繁に演じすぎたのであろう。

彼の生涯を通じて、その反共産主義的姿勢と最新の政治問題への関心が、ギィ・ポーカーを——当時の多くのインドネシア専門家や多くの政府官僚のように——、インドネシアの経済・政治問題の（そしてもちろんアメリカの政策的ジレンマへの）潜在的解決手段として、インドネシア陸軍に引き寄せた。このことによって、彼は他の多くの学者以上に、米軍、国務省、国防総省、CIAへとどんどん近付いていき、そして政府内に幅広い知遇を得た。そのため、ポーカーの研究は次第に政府の問題に応え、政府の見解を採用するという悪循環に陥った。彼が接触を保った個人的友人や専門家の同僚がいたことは疑うべくもないが、結局、公然と親しくしていたのはユスフ・ワナンディのような少数のみだった。しかしながら、ポーカーの持つ人脈はその目的に適っていた。すなわち、それらの人脈

<sup>58</sup> Pauker 2002: 394.

<sup>59</sup> この事件は、オーストラリア人弁護士フランシス・ジョン・ニュガン（Francis John Nugan）と、元グリーンベレーのマイケル・ジョン・ハンド（Michael Jon Hand）が設立したオーストラリアの商業銀行が1980年に破産した後起こったスキandalであり、ニュガンは破産前に“自殺”したとされるが、本当に自殺だったのかは疑わしい。銀行の役員やコンサルタントには、米国高級将校や諜報将校が多く含まれ、頭取は元海軍准将アール・イエイツ（Earl Yates）であり、法律コンサルタントは元CIA長官ウィリアム・コルビー（William Colby）だった。この銀行は、通常の融資ではなく、インドネシアの石油のような投機性の高い投資や、麻薬取引に関わっており、CIAのフロント企業であると噂された。ポーカーは、イエイツ准将との知遇を通じてこの銀行に結び付いていたが、この銀行の「コンサルタント」をしていたことが明らかだったため、証言のために法廷に召喚された。

は、単に彼がCIA、国務省あるいは米軍の名のもとにインドネシア人たちに影響を与えるためだけでなく、彼のインドネシア研究の情報源としてもまた重要だった。そしてそれらは直接的には会議を通じて、あるいはランドの報告書、そして出版物を通じてアメリカの政策に供給されていったのである。

## Bibliography

- Allison, John M. 1973. *Ambassador from the Prairie or Allison Wonderland*. Boston: Houghton Mifflin.
- Bourchier, David. 2014. *Illiberal Democracy in Indonesia: The Ideology of the Family State*. London and New York: Routledge.
- Bresnan, John. 1993. *Managing Indonesia: The Modern Political Economy*. New York: Columbia University Press.
- Bresnan, John. *At Home Abroad: A Memoir of the Ford Foundation in Indonesia, 1953-1973*. Jakarta: Equinox, 2006.
- Budiawan. 2006. "Seeing the Communist Past through the Lens of a CIA Consultant: Guy J. Pauker on the Indonesian Communist Party before and after the 'affair,'" *Inter-Asia Cultural Studies* 7: 4, 650-662.
- Bunnell, Frederick. 1976. "The Central Intelligence Agency—Deputy Directorate for Plans 1961 Secret Memorandum on Indonesia: A Study in the Politics of Policy Formulation in the Kennedy Administration," *Indonesia* 22 (October 1976): 131-170.
- Celebrating Indonesia: Fifty Years with the Ford Foundation 1953-2003*. Ford Foundation in association with Equinox Publishing, 2003.
- Cleveland, Mary. 2004. "Memoir: Mary Cleveland's Foreign Service, 1947-1965," The Association for Diplomatic Studies and Training, Foreign Affairs Oral History Program, Foreign Service Spouse Series.
- Elliott, Mai. 2010. *Rand in Southeast Asia: A History of the Vietnam War Era*. Santa Monica: Rand.
- Evans, Bryan, III. 1989. "The Influence of the United States Army on the Development of the Indonesian Army (1954-1964)," *Indonesia* 47 (April 1989): 25-48.
- Fakih, Farabi. 2014. *The Rise of the Managerial State in Indonesia: Institutional transition during the early independence period 1950-1965*. PhD dissertation, Leiden University.
- Geertz, Clifford. 1963. *Peddlers and Princes: Social Development and Economic Change in Two Indonesian Towns*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Higgins, Benjamin. 1992. *All the Difference: A Development Economist's Quest*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Irwan, Alexander. 2005. "Institutions, Discourses, and Conflicts in Economic Thought," in Vedi R. Hadiz and Daniel Dhakidae, eds. 2005. *Social Science and Power in Indonesia*. Jakarta and Singapore: Equinox and ISEAS, pp. 31-56.
- Kahin, George McTurnan. 2003. *Southeast Asia: A Testament*. London and New York: RoutledgeCurzon.
- Keyfitz, Nathan. 2004. "Notes of a Wayfarer," unpublished manuscript.
- Levy, Robert. 2001. *Ana Pauker: The Rise and Fall of a Jewish Communist*. Los Angeles & Berkeley: University of California Press.
- Lindsay, Jennifer and Maya H. T. Liem. 2012. *Heirs to World Culture: Being Indonesian 1950-1965*, VKI 274. Leiden: KITLV Press.
- Lowry, Bob. 2010. "Colin East Goes to SESKOAD—in 'A Year of Living Dangerously', 1964," *Australian Defence Force Journal* 183: 45-55.
- McDougal, John James. 1975. *Technocrats as Modernizers: The Economists of Indonesia's New Order*. Dissertation submitted to the University of Michigan (Political Science).
- McGregor, Katherine E. 2007. *History in Uniform: Military Ideology and the Construction of Indonesia's Past*. ASAA Southeast Asia Publications Series. Honolulu: University of Hawaii Press.
- McGregor, Katherine E. 2005. "Legacy of a Historian in the Service of an Authoritarian Regime," in Mary Zurbuchen, ed. *Beginning to Remember: The Past in the Indonesian Present*. Singapore: NUS Press.
- McVey, Ruth T. 1971. "The Post-Revolutionary Transformation of the Indonesian Army," *Indonesia* 11 (April 1971): 157-176.
- Moh. Arsjad Anwar, Aris Ananta, and Ari Kuncoro, eds. 2008. *Testimonials of Friends about Widjojo Nitisastro*. Jakarta: Kompas.
- Moh. Arsjad Anwar, Aris Ananta, and Ari Kuncoro, eds. 2010. *Esai dari 27 Negara tentang Widjojo Nitisastro: Penghargaan dari Para Tokoh*. Jakarta: Kompas.
- Mrázek, Rudolf. 1978. *The United States and the Indonesian Military 1945-1965*. Dissertationes Orientales. Prague: Oriental Institute.
- Mrázek, Rudolf. 2002. "Coughing Heavily: Two Interviews with Professor Resink in his Home in Gondangdia Lama 48a, Jakarta, on July 17 and July 25, 1997," *Indonesia* 74 (October): 137-164.
- Oliver, Myrna. 2002. "Guy J. Pauker, 85, Rand Analyst, US. Consultant on Southeast Asia," *LA Times* (September 16, 2002). [Revised obituary, accessed online, February 18, 2016.]

- Olmans, Willem. 2003. *Cry for War*. Breda: Papieren Tijger. Accessed via internet on 1 March 2016. [http://www.dbnl.org/tekst/oltm003cryf01\\_01/downloads.php](http://www.dbnl.org/tekst/oltm003cryf01_01/downloads.php)
- Pauker, Guy J. 1951. "The Study of National Character Away from That Nation's Territory," *Harvard Studies in International Affairs* I: 81-103.
- Pauker, Guy J. 1956. "Indonesia's Government: Charge that Regime is Favorable to Communism is Protested," *Letters to The Times, New York Times* (24 March 1956): 18.
- Pauker, 1958. "Indonesian Images of their National Self," *Public Opinion Quarterly* XXII, 3 (Fall 1958).
- Pauker, Guy. 1959. "Southeast Asia as a Trouble Area in the Next Decade," *World Politics* 11, 3 (April 1959): 325-245.
- Pauker, Guy. 1963. *The Indonesian Doctrine of Territorial Warfare and Territorial Management*. Memorandum RM-3312-PR. Santa Monica: Rand Co.
- Pauker, Guy. 1968. "Political Consequences of Rural Development Programs in Indonesia." P-3864. Santa Monica: Rand Corp.
- Pauker, Guy. 1976. "Statement of Dr. Guy Pauker, Senior Official, Rand Corp.," in *Shifting Balance of Power in Asia: Implications for the Future*, Hearings before the Subcommittee on Future Foreign Policy Research and Development of the Committee on International Relations, House of Representatives, Ninety-fourth Congress. Washington: U.S. Government Printing Office.
- Pauker, Guy. 2010. Ia bekerja Keras Juga untuk Memberi Teladan bagi Orang Lain," in Moh. Arsjad Anwar, Aris Ananta, and Ari Kuncoro, eds. 2010. *Esai dari 27 Negara tentang Widjojo Nitisastro: Penghargaan dari Para Tokoh*. Jakarta: Kompas. pp. 393-96.
- Ransom, David. 1970. "The Berkeley Mafia and the Indonesian Massacre," *Ramparts*, vol. 9, 4 (October 1970): 26-28, 40-49. Reformatted version accessed 1 March 2016. <http://la.utexas.edu/users/hcleaver/357L/357LRansomBerkeleyMafiaTable.pdf>
- Ransom, David. 1975. "Ford Country: Building an Elite for Indonesia." In Steve Weisman, ed., *The Trojan Horse: A Radical Look at Foreign Aid*. Palo Alto: Ramparts Press, pp. 93-116. Reformatted version, accessed online 31 January 2015.
- Rashke, Richard. 2013. *Useful Enemies: America's Open-Door Policy for Nazi War Criminals*.
- Rich, Michael D. 2002. "Guy Pauker: A Eulogy." Rand Corp. Accessed on 2 April 2015. <http://www.rand.org/pubs/papers/P8073.html>
- Rossa, John. 2006. *Pretext for Mass Murder: The September 30<sup>th</sup> Movement and Suharto's Coup d'État in Indonesia*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Sadli, Mohammad. 2003. "Mohammad Sadli," *Recollections: The Indonesian Economy, 1950s-1990s*, The Kian Wie, ed. Singapore: ISEAS. [Reprinted from Mohammad Sadli, "Reflections of My Career," *Bulletin of Indonesian Economic Studies* 29, 1 (April 1993): 35-51.]
- Sadli, Mohammad. 2008. "A 'Bulldog Who Never Lets Go But Can Be Diplomatic Too,'" in Moh. Arsjad Anwar, Aris Ananta, and Ari Kuncoro, eds. 2008. *Testimonials of Friends about Widjojo Nitisastro*. Jakarta: Kompas. pp. 21-24.
- Scott, Peter Dale. 1985. "The United States and the Overthrow of Sukarno, 1965-1967," *Pacific Affairs* 58 (Summer 1958), 239-264.
- Sebastian, Mihail. 2000. *Journal 1935-1944: The Fascist Years*. Lanham: Rowman & Littlefield.
- Sundhaussen, Ulf. 1982. *Road to Power: Indonesian Military Politics 1945-1967*. Jakarta: LP3ES.
- The Kian Wie, ed. 2005. *Pelaku Kerkisah: Ekonomi Indonesia 1950-an sampai 1990-an*. Jakarta: Kompas bekerjasama dengan Freedom Institute. [Translation of *Recollections: The Indonesian Economy, 1950s-1990s* (ISEAS 2003).]
- Vedi R. Hadiz and Daniel Dhakidae, eds. 2005. *Social Science and Power in Indonesia*. Jakarta and Singapore: Equinox and ISEAS.
- Wanandi, Jusuf. 2013. *Shades of Grey: A Political Memoir of Modern Indonesia, 1965-1998*. [Singapore]: Equinox Publishing.
- Yani, Amelia A. 2007. *Achmad Yani, Tumbal Revolusi*. [アフマド・ヤニ：革命の犠牲者] Cet. Ke-V. Yogyakarta: Galang Pers.
- Zurbuchen, Mary Sabina. 2005. *Beginning to Remember: The Past in the Indonesian Present*. Singapore: NUS Press.
- スカラビーノ, R. A. 編 1969 (鎌田光登訳) 『アジアの共産主義』 鹿島研究所出版会。